ある決意

絶対に眠れないと思って蹲ったベッドの中で、俺はいつの間にか眠っていたらしい。気付いたら、雨上がりの朝独特の湿気た空気と、明るい陽の筋がいくつも部屋の中に差していた。

カミュも、アイオリアも居ない。

電気の付いていない部屋の中は、ぼんやりとした灰色で、時計は午前八時過ぎを指している。

ベッドを降りて窓辺によると、綺麗に直されたカミュの寝台がまざまざと目に映り込んだ。胸が、途端に苦しくなる。

締め付けられたままの胸で息を吸うと、肺がひくひくと痙攣する。すると涙が滲んできて、昨日さんざん擦って痛い目の縁に沁みた。

昨日の晩、やっとカミュから三月にあった事を全部聞かせてもらった。きっかけは、昨日二人で行ったロンドン。そこで、カミュがガラの悪い連中を見つけて、そして、そいつらが――――。

千々に、体の感覚まで巻き込んで考えが乱れる。

カミュの不安を取り除いてあげたいと思う。やさしくしたい、慰めたい。そういう当たり前の感情が確かにあるのに、でも、そう願ったのと同じ時間の中で、自分が脳裏で見た映像は、一生、誰にも言えない。

カミュがガイのことを「同性愛好者」だと表現し全身で恐怖を訴えた時、俺は馬鹿だから早太呂点して、カミュがあいつに「レイプ」されたと思った。

物凄い怒りを感じた。怒りの温度が高すぎて、体ごと蒸発して消し飛ぶかと思った。

人間って、曖昧な事に対してそんなに強い感情を抱ける生き物じゃない。シンパシィの感度は、自分と相手との距離に比例するし、見も知らずの人の話や境遇に心が動かされるときは必ず情報を受け取る自分に、感情にリンクするバックグラウンドがある。

カミュの話が、こんなに痛いのは、俺とカミュが同級生で、友人で、俺にとっては物凄く大事な友達で、俺の、俺自身の経験があるからだ。

一年半前、逃げようとしても逃げられないで、自分の意志も存在も何もかも完全に侮られて、そういう行為を押し付けられる形になった。

その時の箍の外れた恐怖。その後の色んな絶望感。忘れようったって忘れられない。

専門のカウンセラーとかハウス・マスターや大人たちは、親切で「忘れなさい」と言ってくれる。けれど、忘れられない。

優しい表情や声音でその言葉を直摯に言って貰う度、やっぱり忘れなきゃいけないような汚い出来事なのかっていう再認識と、忘れる事が可能だと思われるような軽い出来事だったのか？　っていう否定感が何度も何度も体の中を駆け巡った。

今は、その時「オトナ」が随分と配慮に努めてくれていたっ

ていうのはちゃんと分かっている。けれど、だからといってそれで慰められる訳じゃないっていうのも本当だ。去年、第四学年の一年間は美術のコースを強制的に選択させられて、何枚も絵を描かされた。描いた絵を見て、色んな事をあの人たちは言っていたけれど、それが俺の中で何かを変えたわけでもない。

変えてくれたのは、受け止めて突き放してくれたロスと、本気でぶっ飛ばしてくれたリアや、心配してくれた友達。そして、真っ直ぐに切り込んで来てくれたカミュだ。

本当に、大事だと思ってる。心から大切だ。傷つけたりなんかしない。守りたい。

それなのに、俺は――――。

カミュがレイプされたって思った時、そんなの、絶対に気持ちのいい行為なんかじゃないって分かっているのに、知っているのに、それなのに、俺はカミュとセックスという言葉の上っ面を結びつけて、セックスを受け入れているカミュを想った。

そのカミュのイメージは、ずっと前、皆と見たAV女優の恍惚を演じた表情で、俺の頭を真っ二つに切りつけた。

額を窓ガラスにくっつけて、ぼうっと外を眺めていると、ガラスに映る自分の顔も見えてくる。緑の芝生の上に幽霊みたいに俺の顔が浮かんでいる。鼻先、唇、顎、それから、やっぱり芝生。

唇を、自分の唇の影に押し付けてみたら、酷く冷たくて硬かった。

何時までも呆けているわけにもいかない。きっともうすぐ朝食を取りに行っているカミュが帰ってくる。

まだ、カミュの顔は、見れそうにない。どんな顔してカミュを見ればいいのか分からない。でも、一人で暗く落ち込んで周囲を徒に心配させちゃいけないと、何よりカミュから学んだから、どうにか頭を切り替えないと……。

俺は、重くて仕方が無い体を急かして着替え、楽器を抱えて外に出た。

人気の無い、だだっ広いクィーンズベリの敷地の一番端にある丘の上で、俺はひたすら楽器を弾いた。けれど、いつもなら楽器を弾いているうちに潮のように引いていく混乱が、一向に収まらない。

何をどうやっても駄目だと諦める。

それに手付かずの課題があるから、一日中こうやってるわけにもいかない。結局昼食の時間なんてとっくに過ぎた頃合に寮に戻り、食堂の隅に残っていたサンドイッチを一切れ摘んで部屋に戻った。

必要なものを持って図書室に行って、カミュと顔を合わせるのを避けるつもりだった。

でも、「逃げたい」って思っている時って、きっと逃げられないようになっているんだ。

必要なものを持って図書室に行き、カミュと顔を合わせるのを避ける。夕食は図書室から直接行った。日曜の晩のダイニングは私服姿の学生で賑々しい。カミュに鉢合わせしないように、

視線を気にしながら列に並び、一番隅で隠れるようにして食べ物を口の中に詰め込んだ。それからまた図書室に行き、レポートを仕上げる。

カミュの視線に怯えている自分の矮小さに嫌気を覚えながらも、結局消灯ぎりぎりまで部屋には戻れなかった。

のろのろと階段を下り、三人部屋の前でリアと鉢合わせした。いつもなら九時頃には寝台に潜り込んでいるのに珍しいと思ったら、ジョセフ・パーマーの相談にのってやっていた、との事。大きな欠伸を連発したアイオリアは、口も手も早いが相当に面倒見がよくて、下級生からも信頼されている。

閉じていたドアを開けると、部屋の中は真っ暗だった。少し、空気が重い。妙な胸騒ぎを感じて、静かな空間に神経を走らせると、カミュのベッドの方から音の鳴らない笛のような空気の摩擦音がした。

はっとして駆け寄れば、苦しさに体を丸めているカミュが居て、体の血が凍った。

慌ててリアと一緒に医務室にカミュを担ぎ込む。

カミュは、四十度近くの熱と扁桃腺を腫らせて声も出せない状態だった。

昼間、カミュから逃げ回ったりしなければ……！

自分の弱腰と皮肉な現状に、自虐が解決策になりえない事を痛感する。

真っ白くて分厚い羽根布団の間に押し込まれたカミュは、布団の端に熱で火照った頭だけを覗かせていた。カミュの小さな頭や、辛そうな眉毛、薄い唇、白い枕カバーの上に散った細いさらさらの髪の毛、全部が頼りなく儚く見えた。

教会で、跪き台に膝をついて前列の椅子の背に腕を預けて祈るように、俺はカミュを覆っている羽根布団に顔を埋めていた。

俺は、神様に祈っていたわけじゃない。単に自分の後悔をカミュに向かって謝っていただけだった。

でも、そうしたら、薬を飲んで眠っているとばかり思っていたカミュの腕が布団の中で動いて、上掛の下の腕の膨らみが消えた。

俺の頭の上をカミュの手が彷徨って、頬にそれは辿りついた。

「体力のない子供ではないのだし、熱を出し切ってしまえばあとは下がるだけだから……大丈夫だよ」

カミュの宥め声が胸に痛く、頬に感じるカミュの手は凄く熱かった。

カミュが好きだ。

俺は、はっきりと言葉として自分の感情を捕らえた。

友達とか、親友とか、そんな言葉で括れる範囲ではない所で、俺はカミュの事が好きなんだ。

一

「おはよう」という声。椅子を引く音。食器が鳴らす音。てん

でばらばらに響く人間の声。
リアに起こされて食堂に飛び込めば、そこにはいつもの光景が広がってる。
「あれ？　カミュはどうしたんだ？」
ハウが早速気付いて声を掛けてくる。
「昨日の晩から風邪をこじらせて、今、医務室で寝てる」
リアが応えながら、さっさと自分のトレイに朝食を積み上げる。朝の五時前には起きているリアの盆の上は豪快だ。
第五学年が固まっている席に行くと、みんな口々にカミュの事を聞いてくる。どうしてそんなに酷くしてしまったんだって聞かれて、その指摘はフォークで体をぐさぐさ刺されるみたいに痛かった。
いつもカミュと一緒に歩いていく月曜の一時限目の物理の教室への道を、今日は一人で歩く。自分の横で隙間風が吹いてるみたいだ。
昼食の後、時間のあった仲間同士が集まって医務室を尋ねた。カミュの熱はまだ四十度近いという事で、今週一週間は医務室での安静を言い渡された、と湯気みたいな息を吐きながら、カミュは笑ってみんなに説明した。
カミュのそんな姿を見て、カミュが今日休みで良かったなんて暢気な事考えていた胸がペチャンコに潰れる。自分の「アサハカサ」が痛くって、カミュのベッドを取り巻くみんなの後ろからこっそりカミュの様子を覗く。
力の無い、でもちゃんと笑って見せているカミュを見ていると、胸が苦しくて仕方がない。そんなカミュを見たくないって思うのに、見ないって選択肢を選ぶ事も出来なくて、オロオロしながら必死でカミュを見ていた。どうしてみんな平気な顔してカミュと冗談言い合ったり出来るんだろう？
ウォルトがそろそろ午後のクラスが始まるからって、出て行く様子を見せてみんながそれに従う。一番後ろに居た俺が、当然一番最初に部屋を出なきゃいけないわけで、でも、離れがたくて、体を横にしてみんなを先に通した。
「何やってんだよ」
出口への進路を半分塞ぐ形になってしまった俺に、マックスがドンッと肘鉄を食らわせた。カミュの側にまだいたいから、なんて言えるわけがない。俺は慌ててブックバンドの中からノートを二冊引っ張り出した。
「あの、カミュ、これ、物理のノート……」
「馬鹿じゃないか？　熱があるのにそんなもの渡されたって見る余裕ないよ」
振り向かなくったって分かる。この容赦ない指摘はポールだ。
「第一、お前のノートって、読めんのかよ？　お前時々自分でも読解出来ないってノートひっくり返して唸ってるじゃん」
この手加減のないのはハウ。ハウの言葉に、医務室を出た廊下でどっと笑い声が沸く。カミュのベッドに一歩足を踏み出すことも、医務室を出るために体を動かすことも出来すにいたら、ウォルトの腕が伸びてきてノートを攫っていった。
「カミュ、どうする？　置いていくか？　暇つぶしにはなるか

もしれないけど？」
「うん。折角だから」
「ついでにスペルミスも赤ペンでチェックしてやれ」
ウォルトの隣、カミュに一番近い枕元に居たリアが締めの一言を言って、俺はカミュの寝台には辿り着けないまま、医務室を押し出された。傍まで行きたかったけれど、やっぱり行けなくて良かったのかもしれない。廊下に出たとたん肩の力が抜けて、自分が緊張していたのだと分かる。背中にじっとり汗までかいている。
カミュの指が俺のノートを手に取った。別に変でもなんでもない動作の映像が、それからずっと、午後のクラスの間中俺の頭の中で再生され続けて、なんだか俺はずっと心臓がドキドキしていた。

夕食後の様子見、朝食後の朝の挨拶、昼の元気伺い。一日三回、誰かしらを捕まえてカミュのいる医務室に足を運んだ。
火曜の放課後はオケの練習があるから今日はオケの連中を誘って行って見ようか、そう考えながら、ぶらぶらとスミス寮に近い寮の人間に声をかけていたら、じっと自分に注がれる視線に気付いた。振り向いて探したら、ジョシュアだった。
じゃあ、七時半にスミス寮で、とフルートのジョナサンやベースのマーチン、マイケルに手を振って俺は壁に寄りかかって楽譜を片手にじっとしているジョシュアに近づいた。ずっと、待っていたらしい。

どんな相談事だろう？　と思いながら目を覗き込むと、ジョシュアは楽譜の間から一枚の紙を取り出し俺に差し出した。受け取ってしげしげと文面をおってみると、専科の授業オケのコンサートのチラシだった。曲は、ストラビンスキーの春の祭典。
聞きに来いって事かな、と思ってまた目をジョシュアの顔に戻す。
「バイオリンのエキストラを探しているんだ。ミロなら専科のオケでも十分通用するから……」
専科のやつらばかりが居るオケなんてゴメンだ、と咄嗟に思った。でも、ジョシュアの存外に真剣な表情に言葉が詰まる。
そういえば、こいつをこのオケに引っ張ってくる時、俺なんて言ったんだっけ？　一度、中で弾いてみてから決めろとかなんとか、そんな事を言った。
俺は、選択音楽で時々見る専科の奴らの態度とかが気に入らなくて、それから、伝統的に専科の固める室内とこっちのオケの反発を汲んでそんな事をジョシュアに言ったのだけれど、俺自身は専科の奴らのオケで弾いたことなんてない。
安易に「嫌だ」なんて言えない。
自分がその中で演奏した事もないのに、簡単に専科のオケを批判していたこれまでの自分に矛盾に気付かされて、俺は口を歪めた。
専科とこっちのオケの本番は重なってない。だから、エキストラで板に乗るのに問題はない。でも、あと三週間しかない。今から、やってちゃんと出来るのか？　こっちのオケの本番

だってある。授業との兼ね合いだってある。俺は唸った。

すると、ふっと頭の中に全く関係の無い画像がフラッシュバックした。

先の土曜日、楽譜屋で、ルクレールの譜面を探しに来ていたはずなのに、カミュは何故かブラームスのバイオリン・ソナタの楽譜を長い事手にしていた。譜面の形、大きさ、色から以前カミュに一緒に弾こうと誘われた「雨の歌」だって、遠目にも直ぐ分かった。

カミュはもうあの楽譜は持っている。それなのに、何でまた手に取ったりしているんだろう？

俺が不思議に思って見ている間に、カミュは溜息を一つついてその楽譜をまたもとの書架に戻した。その時の映像だ。

そして、その時には気にも留めなかったカミュの変な行動の意味が、ピタッと脳みそのパズルにはまって理解できた。

カミュは、「雨の歌」を弾きたかったんだ。

俺は、やさしくてピアノと交互に歌っていくような感じのあの曲が、どうしても気恥ずかしくて別の曲をやろうって二〜三回合わせただけで止めてしまった。でも、カミュは、あの曲が好きで、本当は凄くやりたかったんだ。それを、俺が我侭言って、いつもの通りカミュはそれを飲んでくれて……。

ああ、しまったなぁ……!!

そんな事、今さら気付いても遅い。でも……。

「交換条件」

口から言葉が滑り出た。

「お前がピアノ、俺に付き合ってくれたら、俺もエキストラやる」

ジョシュアの目がすうっと三日月になった。

「いいよ。じゃあ、こっちの練習は明日からだよ。ミロの方はどうするの？」

「専科のオケが終わった後、毎日一時間」

「決まりだ」

音楽棟を出てすぐにジョシュアとは分かれた。既に用意していたという祭典の楽譜のコピーを手に、俺の心はちょっとだけ軽くなった。

カミュが弾きたがっていた「雨の歌」。ジョシュアを練習台にして上手く弾けるようになって、カミュを驚かしてやろう。

カミュの希望を無碍に断った自分の身勝手さが痛いけれど、でも、いい音楽が出来れば、カミュはいつだって喜んで聞いてくれていたと思いなおして、寮への道を急いだ。

今度はちゃんと、カミュが好きなだけ、何回でも「雨の歌」を弾くんだ。俺は何度も心の中で誓った。

翌日、生まれて初めてプロになりたいっていう奴らばかりのオーケストラに混じって音を出した。

我の強い演奏態度にはうんざりしたが、一つとして外れた音が無い空間には度肝を抜かれた。自分がかつてジョシュアに言ったとおり、聞くだけでは分からない。中に入って一緒に音を出してみないと分からないものがある、というのは本当に至言だ。

音程の揃った空間というのは、広い。オーケストラの端から端まで、クリアに見える。見えるっていうのは、別に目で見ているわけではないのだけれど、耳が凄くクリアに奏者を意識出来るって感じだ。

オーケストラって、いくつもの楽器が層になって出来ている川の流れのようで、音程がクリアだと光を反射す水の表面から川底の小石まで見える、というか……。まるでその場で総譜を覗き込んでいるみたいに、誰が今ここで水面に浮上するべきなのか、水底を進むべきなのか、全部分かる。

サガや、他のパート・リーダー達が、自分たちのパートにこは音をもっと出して、とかどこそこのパートの音をもっと聞いて、とか懸命に覚えこませようとしている事、ここでは個人で出来て、理解していて当たり前なんだと気付かされた。

隈なく見える。だから、自分の位置も分かる。

音は決して外さない。失敗した時に笑いを誘う言い訳をして誤魔化すこともない。

気構えが、違う。

隣に座ったジョシュアの瞳が、どうだ？　と専科生としてのプライドに光っていた。その目に気付いた時、俺は自分の中で何か知らない不安が育っている事に気付いた。

サガやシュラの演奏は凄い。みんな専科にだって負けないと言う。でも、上手い下手じゃない、それだけじゃ済まされない何かが、ここには満ちている。

専科の授業オケの練習は殆ど毎日あり、その後はジョシュアにブラームスの練習に付き合ってもらう。バイオリンを握っている時よりもさらに一段、ジョシュアの瞳の色はピアノの前では強くなる。

ざっと楽譜を確認したあと、ジョシュアは直ぐにピアノの前で姿勢を正した。まずは一緒に一楽章をやってみようとなる。

低いピアノの導入音の上に、滑り込むようなイメージで音を乗せる。カミュとやったときの事を思い出して、なるたけやさしい音を、明るい音色で連ねていく。カミュの演奏は、いつも楽器を弾ける事の喜びに歌っているようだから、なるだけそのイメージに合わせるように……。

クレッシェンドもポルタメントにもジョシュアはピタリと食いついてきた。やっぱりコイツに練習付き合ってもらって良かった、そう思った時だった。バイオリンとピアノの主導権が入れ替わり、俺がビッツィカートで今度はジョシュアがテーマを弾く。それに、ぶん殴られた。

カミュのピアノとは違う。

もっと、堂々と、俺に聴けと命令するみたいに、くっきりと胸の中に切り込んでくる。

これじゃ、カミュが弾きたかったのと同じ演奏にならない。

主導権は、どっちだ？

ジョシュアの命題を受けて、俺の演奏も変わらずにはいられない。この小さい体のどこからこんなに激しいクライマックスが生まれるんだろう、と思うほど、ジョシュアの音は派手だ。どんどんとカミュとやっていた音楽と離れていく。でも、掛け

合いながら進んでいく曲のどこにも、ブレーキをかけるところなんてない。

これじゃ、喧嘩だ。

余計な事を考えていたら負ける。

最後にはその一念で弓を動かすしかなかった第一楽章を終えた時、ジョシュアは憤懣やるかたないといった表情と態度で言葉を投げつけてきた。

「僕は、絶対にバーロウ先輩と同じには弾かないよ！　第一、あんなのがミロのやりたい「雨の歌」なの?!」

喉が塞がって、とっさに言葉が返せなかった。ジョシュアの目はきつく俺を睨み上げてきているくせに、唇は泣きそうに歪んでいる。

俺は、看破してきたジョシュアの勘に呆然とした。

誰の身代わりにもならない。

その厳しくも激しい無言の宣言が、とても重く、そして尊いものに思え、年下の人間を傷付けた自分の失態を恥じた。

ジョシュアと弾くのなら、この曲はジョシュアと俺で出来る事を目指して練っていくべきなんだ。ジョシュアの弾きたい音は、カミュのようにやさしくバイオリンを包み込んで進んで行く音じゃない。もっと、ピアノはピアノとして、バイオリンはバイオリンとして主張していくような、それで一つ曲としての到達点を目指すような音楽なんだ。

カミュと楽器を弾くとき、カミュの音の底に流れる優しさがいつもあたたかくて透明に光っている。それが、自分の周りをそっと包み込むようで、二人で音楽をするってこういうことなのかと思った。

でも、そうじゃないやり方も、それどころか、いくつものやり方があるのかもしれない。

オーケストラで弾くときは、周りの音に溶け込むように、カミュと弾くときにはお互いの音を大事にするみたいに、でも、ジョシュアとの合奏は、互いにぶつけ合うような……。

一瞬、遠い眩暈を感じた。

こう弾かなきゃいけないという答えは、本当は、何処にあるんだろうって。

カミュとは、また、別の機会に、カミュとだけの「雨の歌」を作ればいい。

俺は、もとの動機を横においてジョシュアと楽器を弾く事の辻褄をそんな風に合わせた。弾いているのは同じ「雨の歌」なのだ。きっと、いつかカミュと弾くときにだって練習した分はプラスになっている筈だ。

自分の中に、うっすらと見えかけた楽器を弾くという事の意味が、言葉としての形をとらないまま、暫く空中に彷徨った。専科の授業オケの事、ジョシュアのピアノの事、カミュに話すことが出来たら、きっとカミュなら綺麗に言葉にしてみせるだろう。

けれど、カミュの時には逃げたのに、ジョシュアと一緒にこの曲練習している、というのが後ろめたくて、医務室のカミュにはとうとう言えないままになった。そして、煙のような答え

の感覚も、いつのまにかどこかへ消えてしまった。

カミュの居る医務室に行くのも六日目。明日でやっと二人でロンドンに行って丸一週間、という金曜に、俺はロスから呼び出された。

コントラバス恒例の誕生会をしてやるから今晩十一時にスミス寮の首席室に来い、というものだ。パートを移っても、こうして何かとベースの仲間扱いしてくれるのが嬉しくて、俺は二つ返事で応えた。もちろん、マーチンとマイケルも来る。と、ここで厳かにとんでもない命令が一つ、ロスの口から号された。

「来るときは必ずロープを伝って窓から入ってくる事！」

俺、スミス寮なんだよ？　なのに、なんでわざわざ窓から……!?

俺の疑問は「伝統」の一言で片付けられた。

そして、午後十時の第五学年の就寝時間を一時間過ぎてから、俺はこそこそとスミス寮の外に出て、最上階の首席室の窓が見える裏庭でマーチンたちと落ち合った。目印の窓からは一本の太いロープがぶら下がっている。

「なあ、途中で落ちたら、これ、死ねるんじゃないか？」

マイケルが言う。

「馬鹿、落ちるの禁止命令が出てる」

マーチンが応える。

いくら禁止されても、落ちる時には落ちてしまうのでは？と思うけれど、パートに迷惑をかけないように、ここはやはり落下なんて言うへまはしてはならないわけで……。

マーチン、マイケル、俺の順番でロープにへばりついてスミス寮の赤煉瓦の壁を登った。途中、マーチンの脱げた靴が頭に落ちてきたけれど、人間本体はロープに縋り付いていたから、コントラバスの掟は今年もきちんと尊守された。

開かれた押し上げ窓から、上半身を突き入れて、腕で壁と窓枠を押しながら俺は明るい部屋の中に転がり込んだ。先に入った二人は床の上で尻餅をついて息を整えている。

「おめでとう十六歳！」

その声にはっとして、慌てて部屋の中をよく見ると、スチュアート先輩だった！　俺がクィーンズベリに入学した時の最上級生のコントラバスのパート・リーダー!!

懐かしくて思わず立ち上がって走りよろうとしたら、その腕を誰かが掴んだ。

「とうとう女装したんだってな！　俺らも見たかったぞ！」

スチュアート先輩と同級生のトロンボーンのロバート・ワイズマンが俺の首を絞めてきた。気付くと、狭くはないはずの首席室に、最上学年の金管パートの人間と、オケに関係のないデスまで居る。

「今年はコントラバスの上級生が一人しか居ないからな。華やかにしてやったぞ？」

ロスが、「どうだ？」と言わんばかりの表情で俺を見下ろしている。

これは、人の誕生日にかこつけた「飲み会」だ。最初に「ミ

ロ・フェアファックスの十六歳に乾杯!」なんてトスがあった後は、みんなどんどんと俺の事なんか無視してビールの蓋を開けていく。

俺は、酒は駄目だけど、こうやっとみんなとわいわい騒ぐのは大好きだ。その底なしに明るい騒ぎに、ここ一週間の感情の浮き沈みを思わず忘れて、注がれたビールを舌先で舐めるとこの雰囲気に頭がふわふわと泳いでいく。

そして、深夜零時を時計が指したとき、突然アイオロスが皆に静粛を求めた。みんなの視線がアイオロスに集中した。

「では、これから我がコントラバス・パートの恒例のプレゼントの贈呈を行います」

口に紙コップをくっつけた金管パートの連中が、ワーグナーの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲をハミングしてくれる。ちょっと、いや、かなりドキドキしながらロスの前に立つと、まずはうやうやしくリボンをかけられた薄い雑誌サイズの物を手渡された。

「これは、代々コントラバス・パートに受け継がれてきた、いわばパートの家宝ともいうべきものだ。これから次の人間に渡すまで、しっかりと管理するように」

と、厳かに言われる。

そして次に、小さなダンボールくらいの箱に、やっぱりリボンのついたプレゼントを贈られる。これは、かなりずっしりとしている。

「これは、これから一年間分のお前のオカズだ。十分に味わうように。以上!」

ロスの声に、皆がまた乾杯し、ビールを干し始める。寄ってきたマイケルとマーチンと三人で、まずは最初にもらった薄いプレゼントの包装を解く。

すると、中から出てきたのはもう茶色くなって所々なんの染みか分からないようなブチの広がった雑誌が一冊。大分痛んでいる背を気にしながら、そっとめくってみると、水着のような下着を着た女の人たちや、多分、踊り子の衣装、なんだと思うものを身に着けた女の人の写真ばかりが続いていた。

「これを持って第一次世界大戦に行った我らが先輩は、常にこれを服の下にしのばせ、ついに一発の弾も受けずに帰還されたんだ。有難いコントラバスの守り神だ」

いつの間にか後ろにきていたスチュアート先輩にがっしりと肩を掴まれて、延々とこの古い写真雑誌にまつわる話を聞かされる。

曰く、これを持っていて部屋に隠していた大量の酒がバレなかった先輩、試験に落第点を取らなかった先輩、留年を免れた先輩、カビの生えたハムを食べて腹を壊さなかった先輩、ナドナド。沢山の先例の話をしてくれた。

そうこうしているうちに、マイケルとマーチンはとっとと俺のもう一個のプレゼントを開けにかかっていて、途端、凄い叫び声を上げた。

何事かと思って覗いてみると、俺だってこれくらいは分かる。所謂、成人男性のためのスケベな雑誌の山だった。

「十八歳にもなれば体は一人前だ。だが、こういったものにお世話になりたくても、なかなかレジに持っていけない。そういう後輩の為に上級生が人肌脱いでやる、というのが我々コントラバス・パートの美しい伝統なのだ！」

なのだ、なのだ、なのだ、と叫ぶスチュアート先輩を押しのけて、あちこちから手が伸びて雑誌をめくる。

「俺、この雑誌は初めて見るわ」

「おっ、この号、こんないい写真あったんだ！」

「げっ、これは流石に俺も買えねぇぞ！」

「よくこんだけ品数集めたなぁ……」

後輩にこの手の雑誌を買ってくるのが上級生の度胸試しで、スチュアート先輩はアイオロスの手腕を確認するためにわざわざやって来たのだとか……。そして、コントラバスは毎年勇者の居るパートとして「伝統の誕生会」には金管パートの人間も招待してその勇敢さを広く知らしめるのが儀式なんだとか……。

サガが、自分の部屋なのにこの場に居ないわけが、よく分かった……。

我が物顔で部屋の中央に陣取って、ファゴットのトニー・マクファーレンとビールじゃないものを飲み始めているアイオロスの顔を探った。

ロスって、こういうものを結構見てるみたいだけれど、サガはロスのそういう所、いやじゃないのかな？

ヌード写真を見て騒いでいる金管の上級生はもちろん、普通の上級第六学年より、サガは性的なものから遠いように見える。けれど実際には、サガの言動を辿っていくと、俺がクィーンズベリに入学した当時には既にサガはロスの事が好きで、俺がサガに「好き」だと告白めいたことをした時には、ロスとは両想いだった計算になる。多分、もうキスやアンソニーが目撃してしまったというセックスも、ロスとしていた。全然、そんな行為をするようには見えないのに……。

カミュも、サガと同じくらい同級生の異性に対する関心の輪からさり気無く距離を置いている。それでも、やはりいつかはカミュだって誰かとそんな事をするんだろう……。

カミュがにっこり笑って、手を伸ばして、誰かの首に手を掛けて、それで熱心にその誰かと唇を合わせている想像の映像が、頭の中で大々的に映し出される。

駄目だ……。

なんで、こんなのカミュに失礼だって分かってて、想像しちゃうんだ……。

思わず呻いたら、隣に居たマーチンに服の袖を引っ張られた。

「お前って、どんなコが好み？」

はっとして振り向けば、アルコールに集中し始めた先輩たちから自分たちだけがポツンと取り残されている。そして、マーチンとマイケルが肩を寄せ合って数冊の雑誌を絨毯の上に広げている。

開かれた雑誌には一ページにつき一人、女の人が服を脱いだ姿でポーズを取っている。

二人は俺の顔を覗き込みながら、ゆっくりと一枚一枚ページを捲っていく。

金髪、ブラウン、ストレート、ウェイビー!……みんなにっこり笑っていたり、こっちを挑発するような視線でカメラに収まっている。

「……スゲェ……」

マーチンが一段と胸の大きい金髪巻き毛の写真を見て呟いた。マイケルも賛同の証にゴージャスだって囁き返す。

真っ赤な細いヒールの靴。足首にくるりと一周している赤い細い靴紐。腰を突き出して、丸いお尻には糸みたいなパンツ。胸には重そうな二つの乳房。片手で持ち上げるか支えてるのか、それとも見せているみたいなポーズ。肩や胸、お尻の皮膚は凄く張りがあって自分とは全然違う感じの肉のつき方に少し圧倒された。

興奮を押し殺して食い入るように紙面を追っていく二人を傍らに、俺の気持ちはふわふわと全く別の所を行ったり来たりする。

サガは、ロスのどういう所が特別好きになったんだろう、とか、ロスもサガのどんな所が良かったんだろうとか……。

二人とも、大の親友と言われればなんの疑問もなく納得してしまうけれど、恋人というステージに上がるのには、やっぱり親友以上の何かがあったんだろう。

ムウは、男同士の恋愛感情は「ほしか」のようなものだと言ったけれど、そうじゃない何かがあって、去年あれだけ喧嘩して、今年も恥も外聞もなく衝突して、それでお互いに納得してそういう関係に落ち着いたんだろうか。

親友じゃなくて、恋人。

どっちも、とても大切で大事なものに違いない。けれど、いつから人間の心の中には恋人と呼ぶにふさわしい「好き」という感情が生まれて、どうやってそれだと気付くんだろう。

親友以上の気持ちってなんなんだろう……。サガもロスも、それを二人で見つけたんだろうか……。リアも見つけたんだろうか……。俺たちよりも大切な人を。

いや、より大切とか、大切じゃないとかじゃないだろう。きっとリアはどっちも大切だと言うだろうし……。でも、そしたら仲間と恋人の違いってなんなんだろう? 仲間は男で女の子の一番大切な子が恋人になるんだろうか? でも、そうすると、ロスとサガの関係が成り立たない……。

マーチンとマイケルが何回目かの次のページを捲った。

それは海の写真だった。

え、と思って意識のピントがバチッとその写真に合う。

朝の光線の中、海に裸の女の人。胸にラフな鉱石の首飾りを何個か下げ、濡れた髪が全部後ろに撫で付けられ肩から背中に流れている。

光の当たっている所は金色、影になっている所は赤茶っぽい髪の毛だ。

少し、眩しそうに目を細めてこちらを見ながらうっすらと唇が綻んでいる。

何かが体の中で、どんっ、と一つ大きく脈打った。

「お！　ミロの奴、赤くなってる！」
耳の中にぎゅっと綿が詰め込まれたみたいに遠くに、誰かの声が響く。
「へえぇ。これがミロの好みか。結構地味目だな」
「オフィス系お姉様だな」
「でもこういう大人しくて真面目そうなのが、案外ベッドでは豹変しちゃって激しいタイプなのよ」
「なんでそんな事お前が知ってるんだよ！」
みんなの、楽しそうな声が拾い辛い。顔に熱がどんどん上がって来て、なんだか息まで苦しい気がする。じっと体を固くしていると、ロスが、さっさとバスルームに行って来いと背中を小突いた。
……うん。なんだか、そういう事になっていた。
全然ナンにもやってないのに、突然そうなってた。
取り合えず処理して、手を洗って、ついでに顔も洗おうと体を屈めた瞬間、ちらっと自分の顔が見えた。これでもかというくらい赤くなっている。早く元に直れと、冷たい水でバシャバシャ顔を冷やす。でも、あとから後からほてりが体を駆け上って頭で火が灯るように熱くなる。顔がまるでトマトみたいになっている。
扉がノックされた。何時まで籠っているんだ、一人のバルスルームじゃないぞ、と野次が飛んでくる。
ぜんぜん普通の顔色じゃないって分かっているけれど、精一杯平気を装って個室を出た。
途端に甲高い指笛や「HOT!」「wooOO!!」なんて声が体に覆い被さってきて、またボッと耳が燃えた。
マーチンとマイケルの居るソファに戻ってクッションの中に埋もれると、待ち構えていた二人に「やっぱりこういうのが好みなのか」と聞かれる。もう自棄クソの開き直りで「そうだ」と応えると、二人はまた忙しくページを捲りながら、自分はこういうのが好みだから見かけたらこっちに回せ、手を出すな、と言われる。
マーチンはわりと顔がちっちゃくて丸くて可愛い系。マイケルは金髪の胸と腰が張り出している派手っぽい女の人だ。
そう何度も念を押さなくったって、全然「いい」と思わないから！　と二人のしつこい牽制を払うと、マイケルが「じゃあこの中で好みの顔はどれだ」と女の人の顔だけがシート一面に印刷されたポートレートを引っ張り出してくる。
ざっと見回して、「これ」と指を指すと、「やっぱりインテリ系か」と感心され自分達の好みはてんでバラバラだから安心だな、という話で落着した。
何がどう安心なんだ、とよっぽど突っ込んでやりたかったけど、これ以上この話題を引っ張りたくない気持ちの方が百倍も強くて口を固く噤む。
良かった……。誰も、さっきの赤茶の髪の人がカミュに似てるなんて思わなかったんだ。っていうか、普通は思わないよな……。だって、似てるとこなんて少し赤っぽい髪の色と前髪を上げた感じの額の生え際とか……本当に、ごくたまにふわって

笑ってくれる時の雰囲気とか……それぐらいしかない。

似てる点を列挙するんじゃなくて、似てない点を数え上げるべきだったと気付いた時にはもう遅くて、俺が勝手に自分の頭の中にでっちあげたカミュが、物凄く優しく笑いかけてくれた。直視に堪えない偽者カミュの笑い顔を打ち消そうと、思わず唸ってソファの上でのたうったら、「ケダモノが一匹いるぞ」と冷やかされた。

どうしてそんなにカミュを女の子にしたいんだろう。

自分だって散々ムカついて、「かわいい」なんて言われようもんならくってかかっていたはずなのに……。俺って本当にヒドイ。

男しかいない場所だから、自分の好みのタイプに似ているカミュをそうやって無理矢理変換させているんだろうか。俺の好みのタイプって、カミュみたいな感じの子だったのだろうか。

またぐるぐると空回りしだした思考の渦に気を取られているうちに、目の前に現れたグラスを無意識に受け取って水分を補給しようとゴクリと飲み込んだら、なんだか知らないけれどとにかくアルコールで、目の前が一気に暗くなった。

それからどれくらいたったのか、誰かに肩を揺すられて、目より先に覚醒した聴覚が遠く冷たい空気の中で響く鳥の声を拾う。

「起きろ」

ロスの、低いコントラバスのような、柔らかく響く囁き声が遠くの声を押しやって耳に届く。目を擦って体を起こすと、マーチンとマイクが同じようにロスに起こされている最中だった。窓の彼方に、黒い森の縁が紫にうっすらと光り始めているのが見える。部屋の中に、薄く青く冷たい光が儚く入り込み始めている。

「大丈夫？」

小さな声と一緒に湯気を立てている紅茶のカップが一つ、目の前に現れた。驚いて顔を上げると、しっかりと制服を着て綺麗に髪もとかしているサガが居た。

一体、いつの間に？

外の感じではまだ六時になったかならないかだ。サガは俺にカップを握らせると、静かに歩いてマーチンとマイケルにも同じように熱い紅茶を配った。

サガの動きを目の端で追いながら薄い紅茶カップの縁に唇を付けると、ぷんっと蜂蜜の匂いがした。舌を焼かないように息で冷ましながら口に含むと結構な甘さだった。くっきりとした甘味と紅茶の熱さが徐々に体の中に染み入って、飲み込むたび意識がすっきりする。

その時だった。金色の光の筋が、ぱあぁっ、と部屋の中に飛び込んできた。眩しくて目を反らすと、目を細めて窓の外を見ているサガの姿にぶつかった。その横にはロスが居て、やはり眩しそうに目を細めて立っている。

きれいだった。

何が、どうきれいだっていうのか、説明は難しい。

でも、朝の冷たい空気、透明なけれど柔らかい金色の光、そ

の中に黙って立っている二人は、すごく、すごく、きれいだった。
胸が、痛くて目をカップの中に戻した。
自分が、カミュに求めているものが、胸の中を引っかく。
カミュの親友になりたい。特別になりたい。いつも一緒に居たい。誰よりも近いところに行きたい。それは、俺がカミュを好きだってことなんだ。
友達だから当たり前とか、大事だからあたりまえ、って誤魔化した好きなんかじゃなくて、この世でたった一人の人に向ける「好き」なんだ。
濃く淹れられた紅茶を飲み干して、しっかり目が覚めた後、俺とマーチン、マイケルは、またロスから窓から出て行くように命じられた。貰った大量の雑誌は三人で分けてズボンの背中とお腹に詰め込んでローブにかじり付く。
本当に大丈夫かと、心配を顔一杯に広げて窓辺にくっついて地面と俺達を見守るサガに気持ちよく笑いかけてから、どんどんと金色の波が到来してくる空気に体を浸す。
背中に、やわらかい太陽の熱を感じながら一歩一歩慎重に寮の古い煉瓦の壁に足をかけて降りる。スミス寮の中から、外の太陽の光の強さに比例するように生き物の気配がどんどんと強く立ち上がってくる。
湿気た芝の上に到着すると、三人でまた今出てきたばかりのスミス寮に戻って、俺の部屋に雑誌を運び込む。リアはとっくに起きてて目を丸くして俺達の運んできたものを見た。
一人に一個ずつある机についた本を置くスペースになんてもちろん置けないから、リアから空のダンボールを一個もらって、そこにみんな詰め込んでベッドの下に突っ込んだ。
自分の寮に戻って朝ご飯を食べると言う二人を見送って少しスミス寮の外に出る。
冬の空気に一日一日近付いていく十一月の朝は、光がとても眩しい。朝露に濡れた芝にくっつく無数の水滴がその光を反射して上も下もせわしなく眩しい。
サガの部屋の窓枠からさあこれから下降を始めるぞ、という時、ロスが口の端をちょっと上げて「伝統の品」をくれぐれも大切にするように、と念を押してきた。
「縁結びのご利益もあるぞ」
柔らかな声の響きにはっとして無理矢理顔を上げると、そこにはロスの、滅多に見ることなんてない、まじりっけない優しい笑顔があった。
ロスは、俺がカミュが好きだって、気が付いたのか？
いや、そんなことあるもんか。普通に、深い意味なんかない。ただ、そろそろみんな彼女とか考え始める頃合だから、そう言ってくれたんだ。
たった二人の特別としてカミュが好きで、それは、もしかしたら、ムウの言葉のように周りが男ばっかりだっていう異常な状態でのミスみたいなものかもしれない。学校を卒業して、世界の半分が女の子になったら、女の子をそういう風に好きになるのかもしれない。
でも、ロスとサガのように、もう決めて、決心して、お互い

を互いの特別と決められるケースだってあるんだ。

卒業して、あの二人の隣にそれぞれ別の女の人が立つ事があるだろうか？

きっと、ない。

あの金色の光が洪水していた部屋の中で、二人の周りに漂った清澄な空気を、俺は知っていると思う。父さんと母さんが、農場の仕事を終え日が沈んでいく様子をふと立ち止まって一緒に見たりする。その時、俺も一緒に夕日を見ているはずなのに、何故か二人と一緒の空気の中には立てない瞬間がある。

今、やっと分かった気がする。

二人は、夕日だけではなく、その先の未来の景色も一緒に見ていたということ。

俺の未来は二人の未来に重ならないで、きっとこれからはどんどん離れていくだけだ。けれど二人は、いつまでも一緒に歩いていくんだろう。

その、特別の空気。相手に対する信頼。愛情。大事なもの、きれいな想い。全部が二人の間でそっとサークルを描いて回っていた。俺や妹はその軌道の中の星で、いつか自分たちもそんな輪を一緒に描いてくれる誰かを見つけて……。

一瞬、自分の頭に浮かんだイメージによろめいた。ずっと遠くまで、どこまでもひろがっていく星の重力と遠心力で出来た無数の光の鎖。

突然、まぶたの内側が濡れた。

カミュと、一緒にどこまで歩いていきたい。歩くためには、カミュのたった一人にならなきゃ駄目だ。でも、ロスやサガみたいなのは、凄く稀な結果だっていうのは、分かってる。

でも、もしかしたら、音楽でだったら、そうやってカミュと歩いていけるのかもしれない。音楽で、カミュのたった一人になれたら……。

ボールの声よりも遠くへ、光の中に飛び込んでいけるような音楽が出来たら、カミュと一緒に、どこまでも行けるんじゃないだろうか……？

深く吸い込もうとすると震える胸を励まして、朝の光を吸い込んだ。

カミュが医務室に行って丁度一週間。翌日の日曜の昼に、カミュは俺達の部屋に戻ってきた。一回り細くなってしまったように見えた。そして、今まで知らなかったけれど、カミュは凄く、凄くきれいだった。

カミュの星の鎖に、誰が一緒に繋がっていくのか、今はそれを考えないで、少しでも強く、遠くまで光って、その光でカミュにいつでも呼びかけられるように、自分を高めていこう。

それは、カミュに「同じように好きになってほしい」と勝手な望みを持ってじりじりするよりずっと価値のある事だ。

望むのではなく、望まれる人間に。カミュが素通りできない音楽をやるんだ。

体中の細胞が一遍に働き出したみたいだった。授業を受けるとき、物凄くクリアに教授の言っている事が耳に届く理解で

きる。レポートを書くのも手が追い付かないくらい書くべき事が最後までクリアに見える。そして、バイオリン、何時間弾いても全然疲れなかった。もっともっと上手くなって、カミュの驚く顔を見たい。

何度目のジョシュアとのブラームスだったろう。上機嫌で最後の一音を弾き終えた後、呆れた顔したジョシュアに一言言われた。

「専科にくればいいじゃん」

その一言に、何故か今までのようにすぐ「いやだ」という言葉が返せなかった。

二

専科の授業オケに参加して一番の収穫は、何をうちのオケでやればいいのか、自分なりの答えが見つかった事だろう。

音は外さないのが当たり前、譜面も読めて当たり前、一人で練習できて当たり前、当たり前尽くしの所から始まっているオケの中に座っていると、ジョシュアが「頭がおかしくなる」「耳が悪くなる」などと言って一番不満を露にする「音」の問題について考えてみないわけにはいかなくなった。

この専科での「当たり前」をそのままうちのオケに持ち込めないことは分かる。けれどこのオケの優れた点――音が揃っている――を毛嫌いで見過ごすのは余りにも惜しい。どうしたら、この二つのオケのギャップを埋められるだろうと考えて、技術より音に対しての感覚をもっと重要視する方向に持っていければいいのではないかと結論した。

より合わさって響く音に対してもっと敏感になれたら、結果としてチームワークを重視するうちのオケの理念にも合っていい音楽にまた一歩近付ける。

つまり、時々いるシュラやサガみたいな飛びぬけた技術者がいるから上手くなるオケじゃなくて、いつも音の響きに真摯であるからいいオケになればいいんだ。

第一、サガやシュラみたいな人がいるから「今年はいい」なんて言っていること自体、実は技術主義の専科を毛嫌いしている理由と矛盾しているんだ。

誰が入ったって、やってて楽しいオケを目指すんなら、それに対してだけは譲らない努力をしなきゃならないはずだ。

あるだけのデジタル・チューナーを持っているけれど、周波数おく。みんな各個人のチューナーを練習前に八角堂に揃えておが表示されるものだったり、光の点が付く個数で合わせるものや、基音のAしか合わせられないのだったり、音叉だったり色々だ。

各人が、練習開始前に自分で音を合わせておく。中には、コンマスのくれるAの音を貰ってから合わせる人もいる。そして、みんな「こんなもんか」で済ませてしまっている。

こんなものかで合わせた基音から出る音は、結果、どんどん

雑音が重なって、綺麗に合わさって倍音が部屋の中に響く瞬間なんて生まれる事もなく、だから全計に、集団で音を出すと「こんなもんか」でどんどん流れていく。そして、音楽表現の話だけが白熱していく。ここをこう弾きたい。ここはもっとテンポを落として、とか。

でもその前に、みんなで弾いたって音は合うんだって事をもっと信じていい筈だ。

バイオリン一本じゃ到底出せない迫力のあるきれいな音を、絶対に出せるんだって信じていい。

選んだチューナーは、自分で合わせたい音を設定できる振り子の針が付いているものだ。これが真ん中でピタリと止まれば調子が取れたことになる。

新入生から徐々に集まり始め、その第三学年の新入生を捕まえて操作の仕方を説明して、決められた練習をする前に、全部きっちり合わせる事を言いつけて隣の小ホールに押し込める。

集まってきた第四学年とホールに椅子をとにかくざっと出して、同じようにチューニングをするように言う。

中には自分のチューナーを持っている、という言葉を返してくるのもいたけれど、見せてもらったらAしか合わせられないものだったから、その言い分を却下して用意していたものを使わせる。やってきたアンソニーに、第四学年と第五学年のチューニング要項をざっと説明して今度は隣の部屋に行って新入生の具合を見る。

「合わせられた？」

と聞くと、視線を泳がせる子、聞こえなかった振りをする子、すっきりした返事は一個も返ってこない。それで、チューナーを一個、みんなにも見えるように置いて、マンドリンをやっていたというパトリックの楽器を借りて第三弦を弾いてみる。殆ど合格の音域で調整されている。けれど、針は真ん中より何度か低い位置で止まっている。

「ほら、ちゃんと目で見えるんだから、もう少し音を上げる」

ペグを回して慎重に少しだけ弦の張りを強くする。それから、もう一度開放弦でA線を鳴らす。すると、おー、って感じのどよめきが起こった。

それで分かった。いくら目に見える形でチューナーがあったって、「その」音に合わせるという作業は、楽器を持って一ヶ月やそこらにとっては大事業なんだって。絶対にピタリと真ん中の地点で止まるって、半信半疑になれるくらいには大変なことなんだ。

「ほら、これでAが取れただろ？　で、次がD。これも、少し低い。弦を張るのってちょっとおっかないし、高くなりすぎてまた最初のところから調弦やり直して面倒くさいからちょっと低くてもこれぐらいでいいやって思うかもしれないけど、ちゃんと根気だしてやれば……。ほら、ちゃんと揃った」

G線、E線と順にメーターの針が真ん中を指すように揃えてみせる。そして、G線からE線まで一気に弓を弾きおろすクオドール・ストップで楽器の響きを確認する。

突然の大音量にびっくりした顔をしている新入生一人一人の

顔を見て、苦行を強いているわけじゃない、楽しい事をもっと楽しくするための作業なんだと分かってもらえるように言葉を選ぶ。

「ちゃんとチューニングをすれば楽器は簡単にきれいなしっかりした音を出す。最初は時間がかかるかもしれないけれど、あきらめないで毎回毎回やっていくと、今度は楽器のほうから歩み寄ってくる。すぐにちゃんとした音でベグが止まるようになるんだ。で、互いの楽器を合わせて合奏すると……」

パトリックに楽器を返してAの音を鳴らしてもらっている間に自分の楽器で音階を弾く。倍音とそれから同じAの音の所で二本の別々の楽器から出している音が溶け合うようになって響く。

それから今度は、パトリックのAの音に、ちょっとズレた音を重ねてやる。全然音が膨らまない。そして、最後に、自分の楽器のAの音を出し、パトリックのバイオリンのA線がどうなっているか見させる。

「振動してる！」

そばかすだらけののっぽのステファン・ピーターソンが驚きの声を発した。

特定の周波数に合わせた弦は、その周波数によって共振を促される。そして、弦が震えれば、バイオリンの胴からは……

「本当だ……こっから音が鳴ってるよ！」

耳をこらしてパトリックの持つバイオリンに顔を近付けていた何人かが呟いた。

「つまり、オーケストラで楽器を鳴らすって事は、みんなで一緒に共鳴作業をしましょうってことだ。お前ら全員がきちんと楽器を調整して初めて本当の意味でのオーケストラになるんだ。頑張って大きい音を出そうとか、きれいな音を出そうとかしなくても、自然にお互いの楽器が協力しあって勝手にそこをやってくれる。一人で弾くよりずっと楽チンに格好いい曲が弾けるんだ。真面目に調弦すればな」

ちょっと、くちはばったいかな、とも思ったけれど、最後まで言い切った。だって、本当の事だ。これをやるからオーケストラの意味が初めて生かされるんだ。これをいい加減にしたら、何十人もの人間でいい音楽なんて絶対に出来るはずがない。

「ほら、こんどステファンの楽器。どんだけ合わせたのか見せてみろよ」

バイオリンの中では一番あっけらかんとして物怖じしないっぽいステファンをつっついてチューナーの前に立たせた。と、後ろから呼ぶ声が聞こえた。

「ミロ……！」

振り向くと、アンソニーが背中を亀みたいに丸くして必死の形相でこちらを見ている。お互いに監視して合わせとけ、と言って新人生だけの小ホールを出ると、廊下にはアンソニーだけでなくサガとシュラが居た。

僕じゃ先輩達にミロが言ってた事を「やれ」なんて言えないよ、と体を小さくして俺や後ろに控えている二人を意識しながらアンソニーは「困った」という顔をして言った。

サガの柔らかいこちらの話を聞きたいという視線、シュラの鋭く重さがあるんじゃないか思うくらい力がある視線、その二つの視線をお腹でぐっと体に繋いで、俺は言った。

「専科のオケに行って、やっぱりうちのオケは下手だって分かったんだ。サガやシュラ、一部の人間を除いて、ジョシュアの言ったとおり全然だめだ」

サガの瞳が曇り、シュラの眉がぎゅっと寄った。そのシュラの気配を察してサガが口を開きかける。それを待たずに、言葉を続ける。

「弾けないやつはみんな、サガやシュラ、弾ける奴の音に頼ってる。練習も弾けないところを取り敢えず弾けるようにする。でも、それじゃ、本当のオーケストラじゃないって分かったんだ。

みんな、専科には無い良さがうちのオケにはあるって言う。それは、その通りだと思う。俺も、そこが好きだ。このオケが好きだ。でも、仲良く弾くのはいいオケの条件じゃない。仲のいい音を出すのが、オーケストラの基本中の基本だ。上手く弾くのも、間違わないで弾くのも、みんな個人で弾く時に注意する事で、オケとして弾くときに必要なのは、調弦だ。自分の楽器を弾く前に調弦をする。それと同じだ。オケという楽器を鳴らすために調弦する。そこから始めなきゃいけないんだ。

でも、実際にはみんな「このぐらいでいいか」で自分の楽器を合わせているから、いつまでたってもオケとしての楽器だって、「このぐらい」の音しか出てこないんだ」

シュラの目が怖い。サガを傷つけるんじゃないかって怖い。でも、ここで俺まで「このぐらい」で諦めたら、ずっと専科のやつらには馬鹿にされつづけて、そんな専科のやつらを煙たく思い続けて、どこにもより良くなるためのチャンスを見つけられなくなる。そんな自己満足で五年間が終わるなんて、終わらせるなんて、絶対にいやだ。

「俺は、みんなが完全に自分の楽器の基音は合わせるべきだと思う。まあまあで合わせるのはナシだ。絶対にこの音では全部の楽器が共振して倍音まで響く音を持つべきだと思う。そこに、一人で弾くんじゃない意味があると思うから。

俺は、サガやシュラにデジタル・チューナーなんて必要ないって知ってる。でも、まずは一番上が、トップがやってくれなきゃみんな従わない。全員が合わせるなんて、練習前にやっておく事で、練習時間は曲を弾かなければ時間がもったいない、という意見もあると思う。

でも、そうやって、一番大事なことをいい加減で済ませている限り、絶対に、専科にも負けないいい演奏、うちのオケの良さが生かされる演奏なんて出来ない。

だから?……」

だから、デジタル・チューナーなんて邪道って思う人もいるこのオケの中で、まずはサガやシュラにみんなの目の前で機械を使って調弦する姿を見せて欲しい……!

ここで、引くわけにはいかない。瞬きするのも堪えて二人を睨むように見つめ続ける。

すると、サガの緑色の瞳からすっと緊張が消えた。サガが、隣に立つシュラに微笑みかけながら言う。

「私は、使える道具は使ったら良いと思うし、基音を合わせておくことに異存はないよ。でも、この件は、私より団長から団員に通達するほうが良いかもしれないな。今の私が言ったら、ソリストからの押し付け、もしくは進路も決まった達楽者の気まぐれで、折角のいい試みも来年以降続いていかなくなる恐れがある」

「やるのは構わんが、チューナーの数が足りないだろう。全員チューナーに張り付いて合わせるなら、下級生は一人数分はかかる。正直、俺はチューナーで合わせるのは嫌いだが……まあ、平均律だの純正律だの言う以前の団員が多いのも事実だからな。ただし、そのせいで練習開始が遅れるのはなしだ」

「シュラ、団のチューナーはもう古いし、この際、純正律やピタゴラス律でも合わせられるチューナーをいくつか団費で買ったらどうだろう？　各パートに一つずつあれば、チューナーの前に行列を作らずに済むよ」

「そういうことは会計に言え」

チューナーの数が足りないと言われて、俺が集めてきたのじゃ足らないのかな、と思う疑問を口にする前に、平均律とか純正律とか、新しいチューナーを買ってとか話が進んでいって、俺は慌てた。

「あの、そんなに合わせ方って色々あるの……？」

だとしたら、俺なんて、一つしかやり方知らない……今まで自分では合ってたつもりだけれど、俺こそ色々外していたのかと冷や汗と同時に顔に血が上ってきた。

「ミロは耳が良いから、多分無意識に純正調で弾いていると思うけれどね。実は、十二の音階の合わせ方は、歴史的にみると沢山あるんだよ。鍵盤楽器は音程が決まっているから、平均律で合わせるのが主流だけど、オーケストラでは……」

サガが、突然先生のような顔になって、丁寧にやさしく解説を始めた。でも、俺はサガのその講釈の最初で躓いた。

十二の音階⁇　音って、ドレミファソラシド、最後のドは最初のドのオクターブ上ってだけだから、七つしかないんじゃないのか⁇

頭は必死でサガの言葉についていこうとするのに、もう言葉が意味をなして頭に入ってこない。どうしよう、ちゃんと聞かなきゃ、理解しなきゃ、と焦る気持ちは俺の体をどんどん固くして、しまいには軽いパニックに陥りかけた。

すると、シュラが突然サガの言葉を遮って一言。

「お前、自分が今何調の曲を弾いているのか理解してやっているか？」

「……え？」

息を呑んでシュラを見上げた。サガが、ぴくっと肩を揺らして、

「ミロ、今の曲、チャイコフスキーだけれど、一体なんの音からドが始まっているように聞こえる？」

多分、助け舟を、出してくれたんだろう。でも、さっぱり俺

にはサガがなんの事を言っているのか理解出来なかった。
「何の音からって……ドは、ドから始まっているんじゃないの……？」
サガの瞳がくいっと丸く開いて、停止した。シュラは、踵を返してホールに帰ってしまった。そして、そのホールから団員の注意を集めるためのパンッという手拍子とシュラの声が続いて響いた。
「ミロ、ごめん。後で説明してあげるから……！」
サガが慌ててホールに戻り、アンソニーと俺が廊下に取り残された。シュラの問答無用の力強い声が、今後各人デジタル・チューナーを使っての調律を終えてから音だしの練習を開始するよう号令を下している。どこか気が抜けて呆然としていると、アンソニーがとても控えめな調子で、
「今やってる曲は二長調で、D、レから始まってるんだよ、ミロ……」
と、上目遣いに小声で答えを教えて貰った。
レから始まるって、でも第一バイオリンはファのシャープから、第二バイオリンは確かにレから始まっているけれど、ソロのサガはラの音から始まってるはずだ。っていうか、どの音から始まるなんて、そんなの楽器ごとに違うし、みんながいっせいにレから始まったら、そんなの、おかしいじゃないか！
一気にその不条理な応えに対する不満が膨れ上がったけれど、ホールの中から早く着席しろとアイオロスの声が届いて、俺達は慌てて自分のパートへと駆け戻っていった。

みんなできちんと調弦をしてからスタートした火曜の午後の練習は、夕食ギリギリの時間まで押した。遠い寮の人間は片付け免除で飛んで帰り、比較的音楽棟に近いスミス寮とウェルダン寮の人間で分担した。
「カミュ、病み上がりなんだから先に帰んなよ！」
一週間の休団の後、今日が久しぶりの練習復帰日なのに、カミュは管パートの椅子を抱えて歩き出そうとしていた。それを無理矢理奪って、とにかく帰りなって背中を押す。こんなことでもカミュに触れるのが嬉しい俺は、ちょっと、いや、かなりスケベなのかもしれない……。まずいな、って思うけれど、これぐらい普通の友達とうしだってやるんだから、平気だよな、と思い直したり……。
「いいから！　本当にこっちは気にしなくていいから！　それより、夕飯、俺達の分も取っといてよ！」
ホールの外にカミュの体を押し出して、思いっきり元気に笑って見せる。こんなことくらいで余分にカミュに好きになってもらえるなんて思ってないけれど、いつもカミュの事を考えているってアピールするのは、別に、親友としてだっておかしくも押し付けがましくもないよな？
いい事をしたって気分で、一気にホールをみんなと片付けて、アンソニーやウォルトたちと一緒に走って寮に戻る。みんなは、自分の楽器をホールの楽器庫に預けてあるので手ぶらだからそのまま食堂に直行した。俺は一度自分の部屋に戻って楽器を置いてからもう一度階段を駆け下りる。

席を立ち始めた人たちを避けて、第五学年が固まっている長テーブルに飛び込むと、カミュがテーブルの一番端に着席していて、自然最後に残されているトレイの前に座る俺の向かいになった。

ラッキー。

取り置いてくれた夕食のお礼を言ってフォークを手にして食事を始める。自分の席に近いのは食事に遅れてきたオケの連中ばかりなので、自然話題はオケの話になって、今日から突然始まった調弦に話題が集中する。

本番が一ヵ月後に迫っている今になって、という言葉もあって、俺は、もう一度シュラとサガにした話をみんなにした。

「なんだよ！　じゃ、お前が言いだしっぺかよ！」

話を聞き終わったトロンボーンのマックスが叫んだ。ウォルトも顔を顰めている。

もしかして、また何か知らない間にウォルト達を傷つけるような事をしていたんだろうか？　先月に突然爆発したウォルトの本心は、互いに仲直りをした、という事になっていても痛みはまだ痛みとして胸に残っている。

でも、こういう痛いのを怖がって本当の事を言えなくなったら、それはもう友達じゃない。そう思うから、専科の授業オケで感じた事を正直に、自分なりに誠実に話したつもりだ。けれど、そう受け取られなかったとしたら……。

今度はどんな事を言われるんだろう、って身構えたとき、

「まあ、音合わせは基本だよな」

とウォルトがぶっきらぼうに言った。

「まあ、基本だけどさあ……ぼくら弦楽器は合わせなきゃいけない弦が四本もあるんだよ？　うー、一本やっとあったと思ったら隣の弦がガタッと落ちるとか……減入るよね」

「減入るって、お前、四弦のうち一本の弦合わせたら後は適当とかしてたのか？　これだからビオラは！」

「違うよ！　努力はするけど、完璧って言うのは難しいって話さ！　ウォルト達なんか一回合わせたらそれで終わりだからいいけどさ」

「お前、だったら余計真面目に合わせとけよ……あってない四本の弦を弾く人間がゴロゴロいてみろよ、俺達がどんなにいいソロ吹いたって意味ねぇじゃん！」

「だから！　これはものの例えで……！」

一瞬生まれた緊迫が、アンソニーと金管一人のやり取りでいつの間にか解けてどこかに消えた。気が抜けて真向かいに座るカミュに目を向けると、カミュも、気のせいかもしれないけれど、どこかほっとしたような表情で笑い返してくれた。

まだ隣でギャーギャーやってるアンソニーたちを放っておいて、俺はやさしい雰囲気をふわっと漂わせているカミュにずっと残っていた疑問を口に出して聞いてみた。

「そう言えばカミュって、チャイコンが何調の曲か知ってる？」

カミュの顔が不思議って感じの色で塗り上げられた。

「ミロ！　カミュが知らないわけないじゃないか！」

一体どこに耳が付いているのか、アンソニーがピシャリと自

分の額を手で打って唸った。ウォルトやマックス達の騒々しい声が、わっと上った。

結局、この時も長調の話とか「始まるド」という事については、時計の針が邪魔して話すことが出来なかった。

慌てて食事を流し込んで、トレイを戻す列に並んでいると、俺の前に居たカミュが振り返った。

「チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲はニ長調だよ。実は、有名なヴァイオリン協奏曲の殆どがニ長調なんだけどね」

突然振り返ってくれたから、なんだろうと思ったら、先にうやむやに終わった話の続きだった。

正直、ちょっとがっかりした。折角、カミュがわざわざ親切に教えてくれようとしてるって分かっているのに、「知らない・解らない」という度騒がれたのが面白くなくて、カミュの言葉に素直に有難うって思えなくなっていた。

「……そもそも、長調とか短調とか、曲弾くのに関係あるの？つて所からなんだかで、急に言われても……」

多分、ちょっとむくれている色が出ていたと思う。でもカミュは全然お構いしなしに程よい加減で知識をくれようとする。

「いや、弾くのにはあまり関係はないよ。でも、作曲する方には関係があるかもしれないね。それぞれの調の色があるから。例えば、ベートーヴェンはハ短調の響きが好きだったと言われているし、ヴァイオリン協奏曲にニ長調が多いのは、それがヴァイオリンにとって一番華やかに無理なく鳴る調だから、とも言われている。そういう暗黙の了解を飲み込むには、ある程度調性に関する知識がある方がいいかもしれないけど……」

正直、もう頭の中が満杯だ……。情けない思いでカミュの顔を見ると、カミュは小さく苦笑した。

「まあ、君は理屈で分からなくても感覚で分かっているようだから、全く問題はないよ。言葉で分かっていても、感覚で分かっていない人は多いし、その方がよほど実害がある。……ところで、全く話は変わるけど、明日の午後は忙しい？」

本当に突然話が変わって、俺は「明日の午後」の事を考えるのに一拍分の時間が必要だった。

明日は、水曜日。専科の授業オケの練習がある。だから、当然ジョシュアとその後「雨の歌」を練習するわけで……。

「うん……。あの、先週から俺、専科の授業オケにエキストラで参加してるって言っただろ？　で、その練習が、明日なんだ……。でも、何か大事な事とか、ヘルプが必要な事だったら、いくらでも時間作るから……！」

恐る恐るカミュの顔色伺う。折角何か話を持ちかけてきてくれたのに、二つ返事に話しに乗れないなんて、心象を悪くしたか、じゃ誰か違う人を誘うからいいよ、なんてあっさり言われちゃわないかとドキドキする。すると、俺の心配を打ち消すように、カミュは大事な事じゃないんだ、と手を振った。

「……その、ルクレールの譜読みを一緒にやらないか、と思ったんだけだから。また別の機会にしよう。毎週水曜は授業オーケストラの練習日なのか？」

俺は、ハッとした。

ルクレールの事は、もちろん忘れてなかったけれど、先週あれだけの大病をしたのだし、もっと体調が整ってからだろうと思ってて、全然練習をしていない。

カミュって実はあんまり自分から率先してこれをしようって言わない人間だって気付いたのは何時頃からか、はっきり覚えていないけれど、でも、何か友達同士でこれがやりたいあれがやりたいって言って収集がつかなくなると、まとめる形でじゃあこうしたらいいんじゃないか、これが出来るんじゃないかって風に言うことはあっても、自分から「これを」という事はあまりないんだ。

だから、出来れば、カミュからのこうした希望は、全部全部叶えてあげたい。でも……。

「うん……、あの一応授業の一環だから、月・水・金とやって……その後もちょっと遅れて始めた分その練習とか……」

ジョシュアとの合奏で大分曲が練れてきた手応えがある。だからもう少し回を重ねて、完璧に近づけてからカミュと「雨の歌」をやりたい。カミュの体調の事を考えたら、きっとその方がカミュにとってもいいに違いない。そんな言い訳を心の中で展開する。

でも、「これでいいんだ、いいはずだ」と自分に言い聞かせなければならない答というのは、ダメだ。本当じゃない。何故なら俺は、カミュが、

「いや、勿論、そちらを優先すべきだよ。別に急ぐことじゃないし、本番が終わってからでも構わないから」

って言った時にはもう、数秒前に応えた自分の言葉を全部撤回したくなっていたから。

ジョシュアとの練習はキャンセルする。カミュと弾く。そう言い直したかった。

自分のいい加減さに、言葉が詰まった。

だったら、自分から今週はダメでも来週は大丈夫だと、直ぐにそう言えば良かっただけなのに、その事に気付いたのは夜ベッドに入ってからで、あまりの抜け加減に一人暗闇の中で呆然とした。

けれどどんな偶然からか、カミュとルクレールを引く機会は結構直ぐにやってきた。

三

カミュが医務室から戻ってきて二週間後の水曜日だった。授業オケが終わって、ジョシュアと恒例のプラームスを弾いて午後は過ぎるはずだった。でも、ジョシュアが普通科の授業で出た課題にまだ手こずっているとボロリとこぼしたので、いつもより三十分くらい早く練習を切り上げた。

音楽以外の科目も真面目にやれよー、ってジョシュアを練習室から追い出して、バイオリンを練習するだけならピアノがある個室じゃなくてもいいと思った。誰か他の人がピアノを使い

たいと思っていたら、それを邪魔することになるから。それで、一旦鍵を返して、もっと小さな個室を借りようと廊下を歩いて別の部屋を探していると、ピアノの音が聞こえてきた。

なにか不思議な感じだったので耳が引き寄せられる。すぐに理由は分かった。ピアノ曲を弾いているわけじゃなくて伴奏部分を弾いているだけだからだ。本来片割れの音が響く場所に空洞が生まれる。だからなんだか音が寂しかったんだ。しかも、これ、多分ルクレールだ。

まさか？　と思って早足に音のする扉に近付くと、やっぱり！　カミュだった！

気配を殺して、扉の外でカミュのピアノがふわりと最後のキーを押すのを待つ。

そして、カミュが次の曲に取り掛かる前に、急いでドアをノックした。ドアに嵌ったガラス窓から、俺だよって、顔を覗かせて。気付いてくれと一生懸命首を伸ばしてカミュと視線を合わせようとしていると、カミュがそれに気付いて、笑った。

カミュの口が動いて、入っておいで、と読み取れた。

途端に強くなった心臓の跳ねをもてあましながら、俺は、ゆっくり扉を押し開いた。

カミュが、ピアノの前に座ってる。

それだけのことなのに、凄く嬉しい。

顔に血が上るのを、意識して殺しながら言葉を捜した。

「あの、今、カミュがやってたのって、ルクレールだよね？もし、まだ時間があったら、一緒に弾かない？」

カミュは、ちょっとびっくりしたような顔をして、それからすぐに「いいよ」って言ってくれた。

また、胸が苦しくなる。

でも、今度は締め付けられるんじゃなく、胸の中に入りきらない何かが膨れて痛い。

ゆっくりと、でもなるべく手早く楽器をケースから出す。緩めていた弓をもう一度張って、松脂を軽く滑らせる。A線の音を鳴らして、オケであんなにチューニングしろと煩く言っている自分がこれじゃいけないと思い直して、慌てて二個ある音叉のうちの一個を引っ張り出す。

音叉の端を軽く床にぶつけて、ブワーン、とうなる銀色の冷たい金属を歯に銜える。頭の中や目の中に音の色が広がる。弓を軽く、もう一度A線に乗せる。腕の力を抜いて、弓の重さに任せてすーっと弾く。

バイオリンから、声が出る。

弓を持つ右手に振動が伝わり、耳に、音叉から出る音と弦から出る音が重なり合って、音の階段が見える。口に銜える音叉の振動が強くなった。

うん。やっぱり、音は合ってる。

四四〇に合わせたA線とD線を一緒に弾いて響きを確認する。D線とG線、A線とE線を合わせる。この瞬間が、期待で一番ドキドキする。

さあ、これで楽器の目が覚めたぞ、みたいに。

視力に頼らない調弦を終わって、カミュの姿に目のピントを

合わせると、カミュもピアノの前にきちんと座って、指が鍵盤にかかっている。

何も言わないで、視線だけでルクレールのバイオリン・ソナタ　第三番の最初のトリルを歌った。

カミュのピアノの和音がすぐに曲に入って、ゆっくりと丁寧に曲を進めていく。

牧歌的な舞曲から、陰気な二楽章へ、そしてまた元気のいい三楽章でこの曲は終わる。

「もう一回最初からやってもいい？」

「どうぞ？　ミロ、もしかして初見？」

カミュが、ピアノの椅子に腰掛けたまま見上げてきた。

ギクッと、体が震えたような気がした。

カミュはこうして練習していたのに、俺の方は「春の祭典」と「雨の歌」ばかりやっていて未だにルクレールは練習してなかったんだ。その罪悪感が背骨を走り抜け、じわじわと胸の中をすっぱくする。

初見じゃない、練習していた、と言いたかった。けれど、嘘は、結局つけなかった。

「……うん。ごめん。ずっと前から約束していたのに……」

「いや、全然謝ることはないよ。びっくりしたんだ。凄く上手くなっているから……でも、君は練習したら、このくらいの曲はすぐに暗譜してしまうだろう？　いやに必死に楽譜を見ているから、まさか初見なのか、って」

嘘、付かなくて良かった！　まさか、こんなふうにカミュに練習してないっていうのがあからさまに見えてたなんて……！

恥ずかしくて、顔が火照った。

それからまた一回通して、最初と違うように弾いてもカミュは平気な顔でバイオリンの音を支えてくれた。

背筋をピンと伸ばして、凛とした横顔のカミュは美術館にある彫刻みたいだった。カミュの動かす指の動きも、ジョシュアのそれ違ってとても優しくてキレイ。時々ピアノのリズムに乗せて上半身が揺れるとき、カミュの細いうなじと制服の襟の間に一瞬の隙間が出来る。

ついその一瞬開く裂け目の奥の事を考える自分を、強く反省する。

そんな事考えないで、見ないで、今は音楽に集中するべきで、そうでなくちゃカミュに失礼だ。ごちゃごちゃ考えてしまう二楽章、これがどうもいけない、と考えて、二回目、二楽章がどうも好きになれない。これを飛ばして一楽章と三楽章だけ弾いてはだめだろうか、と相談すると、「確かにミロの好きそうな曲じゃないよね。試験じゃないのだから、好きに弾いたらいいよ」と可笑しそうに言われた。

二楽章の転げまわるような感じと弦のうなりが面白くて、カミュにせがんで何度も相手をしてもらった。そして、やっと気に入る感じでドスの効いたうなりと軽妙なステップを自在に出来たと満足した時、ふとカミュの事が気になった。

自分は、こんな風に「好きだ、嫌いだ」とはっきり言ってカミュにせがむけれど、カミュはそんな事はしない。こんなにピ

アノが上手いのに、控えめなくらいで、完璧な裏方に徹するような所がある。そんなだから、オケの先輩や、同級生にカミュの伴奏というのは随分と受けが良くて、今年の新入生歓迎会以来カミュに伴奏をしてもらいたいと思う人間の数が増えた。

ジョシュアの、絶対に譲らないピアノとはそこだけが違う。

カミュは凄い。俺と同い年でも、ちゃんと自分の気持ちをコントロールして、それが音楽の上でも現れてる。

決して自分の音を押し付けないで、いつも調和としてどう響くか計算している。俺なんかは、どうしたら楽しく弾けるかばかりなのに。

カミュを心底凄い音楽家だと思う。けれど、同時に何か寂しい。

カミュは、いつも俺に譲ってばかりで楽しいのだろうか？

ジョシュアならもっと違う風に弾く。自分自身のために。カミュの音楽は、ペアを組む相手の為に捧げるような音楽だ。それで、本当に楽しいのかな……。

言いようのない不安が、どっと足元から這い上がってきた。

カミュが本当に楽しそうに自分を前面に出してピアノを弾いたのはジャック・ルーシェのバンド曲をロスとシュラと三人でやった時。

そして、この曲がやりたいとはっきり言ってきたのは、「雨の歌」だけだ。

「あのさ、」

深く考えるより先に言葉が出た。

「俺、実は最近ずっとジョシュアにブラームスの「雨の歌」の練習に付き合ってもらってたんだ。で、少しは弾けるようになったと思うから、よかったら弾いてみない？」

カミュがあんなにやりたがっていたこの曲なら、もう少しカミュの本心が見えるかと期待した。人に譲るばかりじゃないカミュの音が聞けるかと思った。でも、カミュから返ってきた返事は、自分の我侭を思い知らされるものだった。

「……練習していないから、無理だよ。あの曲は……そんなに、簡単じゃない」

どうして、俺は、いつも自分の都合とか、希望とか、そんなのしか見えてないんだろう。

カミュがやりたいって言った時には、曲の持つ甘い雰囲気に尻込みして断ったくせに、今さらカミュを喜ばせたいからって「弾こう」なんて。カミュの気持ちを全然無視してるじゃないか……！

「ごめん。あの、カミュがこの曲好きだと思ったから……」

カミュが、好きだと思ったから、練習したんだ、とは最後まで言えなかった。まるで、お前の好きな曲だから練習してやったんだぞ、みたいに恩着せがましいと気付いたから。

何をやってるんだろう、俺。

カミュと楽しい時間を過ごしたい。カミュに喜んで貰いたい。それだけなのに。

どうやってこのチリチリと胸を焼く空気を払拭しようか、カミュに笑ってもらえるか、必死に答えを探しているとき、カミュ

の口から全く予測もしていなかった言葉が発せられた。

「ミロは将来何になりたい？」

完全に脈絡のない話に、半分びっくりして、半分救われた気分になった。肩の力が抜ける。

「一番は、獣医。それが無理だったら、学校の先生。……でも、やっぱり獣医がいいな。それで、色んな動物と暮らせたら凄くいい」

ほっとした気分で言葉を返し、それからカミュとこんな話をするのは始めてだと気付いて、ちょっと目を見張る。

びっくりして次の言葉を待つ俺のまん前で、カミュはさっきまでの気まずい空気なんか匂いすら覚えてないって感じで、俺の応えに笑った。

「でも、獣医になるには、動物実験を乗り越えないといけないよ？」

少し、カミュの濃い紅茶色の目にからかう様な、不思議な色が浮かんでいる。

「動物実験」という物騒な言葉に、ちょっと怯んだ俺は、カミュの問いには直接答えず、じゃあカミュはどうなんだ、と聞き返した。

カミュが、将来何になりたいかなんて、知らない。知らなかった事を、カミュの話を今聞ける。ドキドキしてカミュの答えを身構えて待っていたのに、カミュの応えは実に拍子抜けだった。

「実は僕もまだ決めてない」

なんだ。カミュもまだちゃんとは決めてないのか。残念のような、ほっとするような気持ちで呆けていたら、すぐにカミュのしっかりとした声が耳を打つ。

「でもAレベル選択科目のGCSEの成績は大学進学に影響するから、お互いそろそろ考え始めないと」

「うん、でも文系に行く気はないから、取りあえず理系科目を頑張ればいいんじゃないか、と思ってるんだけど……」

楽器を肩から外してピアノに背中を預けて、天井を眺めながら応える。

「でも、理系でも人文系の科目が要求される分野もあるし。例えば、建築なら美術とか、歴史とか」

カミュの言及は俺が苦手な細かいところを詰めるような話になってきた。正直言うと、獣医になりたい、と言っても、実はまだ獣医の大学に入るにはどの教科を履修しておけばいいのか、きちんと調べてない。

そして、もっと恥ずかしい事を言えば、この獣医、という将来の職業も実は母さんが向いてるんじゃないか、って言ってきたのをそのままそう思っているからで、ちゃんと自分で真剣に考えた結果じゃない。

そんな自分のいい加減さがカミュに見透かされているようで、そしてカミュに「自分の将来もちゃんと考えていないダメな奴」と思われるのが怖くて、懸命に何かもっともらしい言葉を自分の中に探した。けれど、もともと今までそんな事に注意を払っていなかったのだから見つかるはずもない。

すると、カミュの口から小さな溜息なのか笑みなのか判然としない空気の漏れる音がして、奇妙に緊張を孕んだ静かな声を

聞いた。
「君に一番合う職業、教えてあげようか」
カミュの静かな、平らな言葉の奥に、一瞬何か火傷するような熱さを感じたのは、気のせいだったのか。でもそんな事深く考える間もなく「何？」とカミュに問い返していた。
カミュが、俺に合っていると思う職業。
カミュは、俺にどんな職業があっていると思っているんだろう？　俺の事、どんな風に見ているんだろう？
ほんの一拍置いて、カミュの声が狭い部屋に響いた。
「ヴァイオリニスト」
カミュは、決して大きな声なんて出してない。でも、カミュの声は、一瞬確かに俺の呼吸を止めて、体の中に反響してガンガンと響いた。
「何……？」
古ぼけた壁をお気楽に見ていた自分の目が、ぎょっとしてカミュを見詰める。カミュは、びくともしないで笑って、そして、まるで数学の答えがこうなる理由を説明するみたいに淡々と俺に口説いた。
「なれるかどうか、ということをひとまず棚に上げて考えれば、これほど君に合う職業はないよ。まず、仕事で喋らなくていい。必ずしも人と同じ行動をとらなくていい――勿論、腕によりけりだけれど。仕事の取引相手と飲食の付き合いをするとか、上司のご機嫌をとるとかいう事も、基本的にはやらなくていい。どう？」
「どう、って言われても……」
まだ、体の中でカミュの言葉が響いている。そしてカミュの説明に、考えが付いていかない。
「考えてみなよ。この全てが免除されている職業が、他にどれだけあると思う？　まあ、ご実家の農場はそれに近いかもしれないけど、あのナショナルトラストの土地を君が相続することは出来ないんだろう？」
「そうだけど……」
「ミロならプロになれる、とかいい加減なことを言うつもりはないよ。――ただ、僕は、君はあの世界の人間だと感じる」
聞き間違いでも、思い違いでもない。カミュは、俺に、バイオリンのプロになればいいって言ってるんだ。
やっと理解できた時、本当に、咽の奥でひゅっと空気が止まった。
びくりとも動けない俺に、カミュは淡々と「楽譜を片付けて寮に帰ろう。夕食の時間だ」と言った。
寮への帰り道でも、食事の最中も、部屋へ戻ってからも、カミュはもう二度とこの話はしなかった。
きっと、少しバイオリンが弾けるから、だから、よかれと思って「バイオリニスト」なんて言葉を言ってくれたんだ。
バイオリニストになれるくらい上手いね、というのは、褒め言葉だ。
「バイオリニスト」という言葉のすぐ裏に広がる夜の海より広くて深い何かがとても怖くて、俺はカミュのこの言葉は忘れ

よう、と自分に言い聞かせた。
ただの褒め言葉だ。
真に受けちゃいけない。
自惚れちゃいけない。
ベッドの中で、何度も何度も戒めの声を頭の中に擦り付けた。

自分の誕生日のある十一月は、あっというまに過ぎた。カミュとのロンドン、カミュの告白、自分の気持ちに気付いて、落ち込んで、でも、バイオリンがあると思って……。
一週間のカミュの不在。専科生に混じってのオケ。ジョシュアとのブラームス。コントラバスのみんなにお祝いされたどんちゃん騒ぎ。ヌード写真。全団員でのチューニング。カミュとのルクレール。そして、カミュの言葉。
起こった事全ての整理が間に合わなくったって、カレンダーは今年最後の月になる。
十二月になると、クィーンズベリのコンサート・ホールでは一週間おきにオケの演奏が披露される。第一週目が専科の授業の一環としてやっている授業オケ。グレードの関係上これが一番最初。次が専科の人間で固められた室内管弦楽。そして、最後の三週目が俺達のオケ、クィーンズベリ交響楽団。
将来についての訳の分からない不安も、迫る本番と学期末試験に押しのけられてそれどころじゃなくなる。逃げだとは分かっているけれど、将来の事は、全部の事が終わってから、冬休みにちゃんと考える、と自分に言い訳する。

そうやって毎日を過ごして、ジョシュアに誘われてのる事になった「春の祭典」の本番がやって来た。
舞台脇に集合して、リハーサル通りにパート毎に一列に並んで待機。アナウンスが入ってホールから軽く起こった拍手を合図に、列が動き出す。
制服のネクタイをきちんと首元で締めて第一バイオリンの中ほどの席に着席する。隣はバイオリンの専科で入っているジェフリー・アーチャー、第四学年だ。俺が表で彼が裏。少しの居心地の悪さを、曾耶ちゃんのバイオリンを指で確かめて鎮める。
コンマスが入場する。続いて、側頭をくるりとふわふわの白い髪に囲まれていた作曲が専門のジョージ・オーウェン教授が指揮台に立つ。
深く息を吸って、指揮者の顔を見る。指揮棒が、すっと空気の中を泳ぎ始めた。

練習した総時間に比べて、本番っていうのはなんて短いんだろう。演奏は観客としてホールの中に座っていた専科生たちからまずまずの拍手を貰って終わった。授業としてのオーケストラ演奏なので、通常のコンサートを支える裏方、みたいなものはない。みんなで今まで座っていた椅子を片付けて譜面台を仕舞う。
終わったんだ、と思った。もう、ここに入る学生と同じ空間で楽器を弾くことは、終わったんだ、って。
オーウェン教授、いつもマイペースで、ひょうひょうとして

て、甘いものが好きでポケットに必ずチョコバーが入っている。音のクレッシェンドとデクレッシェンドの意味をボールが床に跳ねる図で説明してくれたのが面白かった。

コンマスのウィリアム・コリンズ。最上級生。いつも誰かがミスをすると凄く神経質にいやな顔をしたりわざと足を鳴らしたりしていやな奴だけれど、俺に付いて来いっていうあの迫力は凄いと思う。シオンも凄かったけれど、ウィリアム・コリンズはシオンよりもう二つくらい緻密で神経が尖っている。

弦の後ろに座る管の連中も凄い。うちのオケにいる時は、管のソロがあったり目立つ旋律があると自然と肩が彼らの失敗を予測して緊張してしまうのに、ここの奴らは絶対に失敗を恐れて無難を求めないし、本気で旋律に命を懸けてる。時々、会心の音が響き渡る瞬間があって、背中から頭を通り越して響くその音は本当に気持ちがいい。

人より上手く、人より目立つ、人より評価を得る、その空気は好きになれないけれど、音の響きだけは圧倒的に根本が揺るがない。

もし、うちのオケにこれだけの基礎があったら、きっともっと色々の事が出来るに違いない。そして、みんなも、本当はそういうことがしたいに違いない、と思う。

だって、みんな、本当に音楽が好きな楽団バカだもの。俺なんかよりよっぽど沢山の曲を知っていて、これが出来たら、今度はこれをみんなで弾いてみたい、っていつも年に一回あるプログムの選定には自分の曲への情熱をあらん限りぶちまけて票を集めようとする。

その情熱と、基礎が毎年維持出来れば、きっと専科と比べたって遜色のないオケになれる。

この音から、今日のステージでさよならをする寂しさを、新しい目標を見る事で宥める。既にあるものの中に身を置いて満足するのは容易い。でも、それよりも、きっとゼロからみんなで積み上げていく音に、きっと自分は満足するに違いない。

二週間後の演奏会には間に合わない。でも、一年後、二年後、まだまだ自分たちは伸びていけるはずだ。

別に友達なんかが出来たわけでもないので、もくもくと片付けをしていると、ポンッと肩を叩かれた。オーウェン教授だ。もう燕尾服からヨレヨレのセーターに着替えてる。

「君は真面目だね」

なんて応えたら分からなかった。分からないから、思わず眉を顰めて教授を見上げたら、

「いや、普通みんな下級生にやらそうとする片付けなんかもよくやっていたよね」

あ、なんだ。そんな事か。眉から力が抜ける。

「自分で使ったんだから自分で片付けるのは当然でしょう？」

そう言って、まだほったらかしになっているチェロ・パートの椅子を重ねて持ち上げる。

「でも、君はエキストラで途中から入ってきたのに、よく追い付いた。随分練習したんだろうね」

また眉間にしわがよる。

「やるって引き受けたんだから、ちゃんと仕上げなきゃ足手まといになるだけでエキストラの意味がないじゃないですか」

にこやかに目の前に立つ人物の意図を測れないで居心地が悪い。早くこの教授から離れたい。足がじりっとあとずさる。その瞬間、俺は誕生日以来三度目の思いがけない言葉を聞いた

その日の晩、夕食が始まっている時間だと知りながら、俺は夕寝のために横になったベッドから起き上がれずにゴロゴロしていた。お腹は空いているのに動く気力が湧かない。

それでも、「元気が出ない時こそメシは食っとけ」というロスの言葉が記憶の底から甦ってきて、のそのそと寝台を離れて階段を下りた。

みんな、愉しそうにしている。学期末試験で苦しい時期だけれど、試験も一種のお祭りみたいなものだから、みんなの興奮度合いがいつもより高くて食堂の中もざわざわしてる。

みんなはどこに居るんだろう、って見渡すと、リアの上げた手が目に入った。

人を避けながら進むと、きちんと全部のメニューが少しずつトレイにのって一人分、取り置かれていた。

隣のテーブルからアンソニーが、本番お疲れ、と声をかけてくれた。マックスやウォルトもどうだった、と聞いてくれる。

「取り敢えず、失敗はしなかったと思うから、まあまあなんじゃないかな」

言ってから、水で喉を湿らせてサラダのレタスにフォークを突き刺した。のろのろ食べていたんだろう。リアが、さっさと食わないと食堂閉まるぞ、と一言。

「うん……」

と生ぬるく応えると、調子でも悪いのかって、すぐに聞いてくる。リアって、本当に、いい奴だなぁ……。そう思ったら、なんだか一人でに笑えてきて、変な時間に寝たら、まだ頭もお腹も起きてない、と言ったら「バカだなぁ」とリアは溜息一つついて席を立った。

席を立ったリアの穴を埋めるみたいに、今度はカミュが柔らかく話しかけてきてくれた。

「春の祭典、格好良かったじゃないか。しかもエキストラなのに4プルトの表に座っていたからびっくりしたよ」

「え？　カミュ、聞きに来てたのか？」

最近何かと忙しいようだったから、意外だ。

「うん、ミロがあれだけ感銘を受けたらしい春の祭典を聞いてみたかったからね。ポールも居たよ」

なんだ。ポールと一緒か。じゃ、きっとポールが誘ったんだな。カミュと二人でオーケストラを聞く、そう言えば、一緒にのることはあっても、二人で一緒に聞くって言うのはしたことがない。当たり前、といえばあたりまえなんだけれど。それでも、そんなふうに仲のいい二人がちょっと羨ましい。

「うん、まあ、俺より後ろは揺副科でヴァイオリンとってる人達だったからさ……。最初は後ろに座ってたんだけど、彼等遠いトップまで見る余裕がないから、中継になってくれって、席

替えされた」
フォークの間を滑っていくミニトマトに神経を集中している振りをして自分のつまらない嫉妬がカミュの目に止まるのを防ぐ。カミュは全然そんなの気付いてない。普通に会話を続けてくれる。
「それで、最後に指揮者のオーウェン教授に呼ばれていただろう？　何を話していたんだ？」
てっきり、また曲の話とか、ここはよく出来ていたね、とかそんな話だと思っていたのに、とんでもない所に話題が来た。
カミュは、一体どのくらい距離から見ていたんだろう。カミュの普通の調子に合わせて返答するのが、きつい。どこまで話せばいいんだろう。どのくらい、話していいんだろう……。
「うん……手伝ってくれて有り難う、って」
迷って、俺は、一度無難な所で話を切った。
ここで、終わらせてしまうべきだって、分かってる。
分かっているけれど、我慢できなかった。
「……あと、転科するのか、って訊かれた」
聞きようによっちゃ、自分が弾けるって自慢してるみたいに聞こえるだろう。でも、そうじゃない。そうはとならないで欲しい。そんな、祈るような思いも込めた言葉だった。でも、そんなのカミュを見くびった危惧だった。
「凄いじゃないか！　それは、教授の目に止まった、って事だろう？　それで、なんて？」
カミュは、物凄く嬉しそうに目を輝かせて、話の詳細を促した。ほっと息を吐き出すのと、自分が何かを怖がっていた事、そして、それが現実には起こらなかった事にぼんやりしている自分が分かった。
「……いまのところ、考えてない、って……」
そう言った、とカミュに気の抜けた間抜け面で応えていたと思う。多分、カミュになら「まさか、自分なんて」と言わなくてもいいんだと実感として安心したんだ。だから、こんな、甘え以外の何ものでもない質問なんてしてしまった。
「俺、本当に、そっちでやっていけると思う？」
さんざん今までそんな素振りも見せなかったのに、ちょっと教授に声をかけてもらったくらいで、何を舞い上がっているんだ。そう思うのに、聞いてしまっていた。
「君は指が回るし、大丈夫なんじゃないか？」
カミュは事も無げに言葉を返した。
そのあまりにもあっさりした口振りに、拍子抜けする。
そう思った時、突然背中がバンッと相当に強い力で叩かれ熱くなった。
「ミロ！　スペイン語のグループレポート、明日閉め切りだぞ！　もうお前の担当以外全部できてるんだ。お望み通り本番終わる迄待ってやったんだから、絶対に今日中に上げてくれよ！」
ハウだった。
痛い、と思った次の瞬間に、そうだ、ベッドでゴロゴロしている場合じゃなかった！　と思い出し慌てて立ち上がる。とそこに、ビニル容器を持ったリアが現れて、それに残りの食事を

詰め込んで、俺は大急ぎでレポートを仕上げるために部屋に駆け戻った。

消灯ぎりぎりまで粘って何とかレポートを書き上げてハウに渡して、ベッドの中に飛び込んだ。今日の見回りはシュラだからだ。

時間きっちりに見回りの足音が扉の向こうで響いて、次々に扉が静かに開かれる音がする。この部屋の順番になって、少し軋む音を立ててドアが開いた。

別に、何も悪い事をしているわけでもないのだから、そんな息を押し殺したりしなくてもいいのに、どうも団長が見回りに来ると思うと行儀良くしなくては、という気分にさせられる。

夕方、変な時間にうとうとしたせいか、寝入りばなに体を硬く緊張させたせいか、なかなか体が眠りに入っていく様子を見せない。

こういう夜は疲れる。考えなくていい事を考えて余計に眠れなくなる。家に居るときのように眠くなるまで犬を撫でているとか、部屋の中を歩いたり、本を読んだり出来るわけもなく、ただ同室の眠りの邪魔にならないようになるべく静かにしていなくちゃならない。

寝返りも、打つのも三百まで数えたら一回、また三百数えて一回、となるべくカミュが寝てしまうまでは静かにしていよう、と思っていたのに、この夜はカミュの方から声がかかった。

「ミロ、起きてる？」

カミュの声はピアニッシモでもよく空気に透る。

「……うん。カミュも眠れないのか？」

俺の囁き声は、カミュの声のように澄まないで空気の雑音が一杯入ってる。

「……まあね」

「そっち、行ってもいい？」

「どうぞ」

カミュの声に、毛布をバサリと捲り上げて担ぐと、ジャンプするように部屋を横切ってカミュの寝台の上のいつもの定位置に納まった。運んできた毛布をマントのように自分の体に巡らせる。

ニア・ソーリよりずっと南にある学校だけれど、十二月ともなればどこからかすうっと冷たい風が部屋に入り込んできて、じっとしていると結構冷える。

カミュも自分の毛布を手繰り寄せて暖かくしている。そんな様子から、大分十一月の風邪に懲りてるみたいで、少し、可愛く思った。

「……なんか、こういうの珍しいな。カミュでも眠れないことあるんだ」

「たまにはね」

カーテンで遮られた窓からは、人の輪郭を見るには十分な明かりの補助は受けられても、その表情までは見えない。

「……進路のこと？」

なんとなく、二週間後のオケの本番ではなく、学期末試験の

事でもなく、カミュが考えている事は、今の俺と同じ事に思えて聞いてみた。
「……うん。皆、もう結構決め始めているから。リアは歴史の教師になりたいって言ってたし、ウォルトは経済か、考古学だって。ポールは専科に声楽で転科するつもりで、個人レッスンも受けているらしい」
小さな、けれどしっかりした声で伝えられた話に、俺は今までカミュはもちろん、リアともそんな話をしていなかった事に気付いた。ウォルトも自分の目標を持っている。
俺がまだそんな明確なものがないのだから、そりゃそういうものを持っている奴とは話が出来るはずがない。
出遅れた。と正直思った。理由の見えない焦りも感じる。
そして、ポール。転科を決めたなど……きっと、カミュと随分話し合ったことだろう。そして、カミュも自分の未来についてポールに話したんだろう。
「まあ、九科目全部Aをとればいいだけの話、と言ってしまえばそれまでだけど」
カミュの声が、少し色褪せて聞こえた。と、ふいにはっとした。ポールが転科する、という事は、カミュだって転科する可能性があるんだ。堪らない不安になって聞いた。
「カミュは、ピアノ科に転科しないのか？」
多分、本当は、否定する言葉が欲しかった。まさか、転科なんてしないよ、って。けれど、カミュの応えは俺の身勝手な希望をキレイにばっさりと切り捨てた。
「君の場合よりも、もう一段階くらい難しそうだな。僕はそんなに指回しが得意じゃないから」
明らかに、カミュは転科の道も考えていた。
冷静に、見て、考えて答えを出そうとしている。カミュのその建設的な態度に自分の不甲斐無さが恥ずかしくなる。同時に、もしかしたら、カミュは俺も転科するかもしれないと思って、だからこんな事を話してくれるのかもしれないと思い、その折角のカミュからの仲間意識を断ち切る事も出来ないで俺は力なく、この話題を途切れさせないような話題を口にした。
「指回しってそんなに大事かな……」
そんな事、全然気にしてない。カミュが、本当に転科するのかどうか、それだけが知りたい。
「勿論音楽性は絶対条件だけど、僕等の年齢で専科の人間と一番差が開いているところは結局どれだけ指が動くか、だろう？
しかも、その差は簡単には埋まらない……例えばピアノ科の五年生の中には、リストやラフマニノフがそう苦もなく弾ける学生がいるだろうけど、今の僕では多分半年くらいかかる。その間に、彼等はもっと難しい曲に挑戦するだろう。それを考えると、君はパガニーニなんかも結構速いテンポで弾き切るし、もう少し専科のレベルに近いところに居ると思う」
カミュの言葉は理路整然として、明らかにこれまで色々と思考した結果だと知れた。そして、俺はもう少し自分より転科できる可能性があるのではないかと言われた時、一瞬、胸が潰れるような痛みを感じた。

「速ければいいってもんじゃない、って、いつもカミュ言うじゃないか」

ますます俺の言葉は力がなくなっていって、もしかしたらカミュにも聞こえないんじゃないかって思う。けれど、きちんとカミュは俺の言葉を掬い上げて話を続ける。

「それはそうだよ。だけど、速いものを遅くするのは簡単だけど、逆は難しい。……それに、君は、間近に専科の演奏を聴いて、ただ速いだけじゃない弾き方があるって気付いたんだろう？」

それは、そうだけれど、と言葉しかけて、俺は言葉を止めた。だって、カミュ、どうしてそんな事が分かるんだ？

俺は、専科の連中を褒めるような言葉はチューニングの時を省いて、うちのオケの人間の前ではした事は無い。こればっかりは、人から言われるのじゃなく、自分で実感しなければ、偏見ってものは簡単に無くならないって身をもって知ったから。

冷たい空気の向こうのカミュの気配が、笑ったように感じた。

「君、気付いてないのか？　専科の授業オケに参加するようになってから、急に上手くなったよ」

あっけに取られた。

どうして、カミュはこんなに気配りが深いんだろう。一体カミュはどれだけの注意を自分の友人たちに向けていて、それをひっそりと自分の中にためているんだろう。

カミュの、その広く深く誰にも向けられる彼のやさしさが冷たい雪のように胸の中に降る。とてもキレイなのに、自分のものにしたくて手に握り締めれば消えてしまうんだ。

もし、カミュが、俺が専科に行くのを迷っている、と思っているのなら、その思い込みを今はまだ打ち消したくなかった。

「本当に専科でやっていけるのかな」

凍えるような思いで口にした疑問に、カミュは模範的な答えを出す。

少なくとも向いていると思う、と。以前言われたのと同じ言葉。

当たり前だ。人の未来なんて、出来るかどうかなんて、そんなのどうして同い年のカミュに断定出来るだろう。

酷い質問をした、と自己嫌悪の気持ちが重く喉の下から胃に向かって垂れ下がる。

俺が知りたい質問は一つだけだ。

「カミュは、専科に行くつもりなのか」

カミュは静かに、すぐにＹＥＳとは言えないと言った。考えなければいけない要因があり、それを克服できるかどうかはまだ分からないと。

そうだ。自分で、考えて決めるんだ。みんなそうしているんだ。それなのに、俺は、カミュが転科するのなら自分も行きたいと、叫ぶようにして思った。

四

未来の事を、人はどうやって決めてその道を進むのだろう。夢だろうか。希望だろうか。計算だろうか。

カミュから転科の可能性を考えているという話を聞いてから、俺の気持ちは焦りと痛みと迷いで一杯になっていた。

せっかくカミュを音楽で振り向かせようしたって、専科に行けばカミュはきっと誰からも求められる。カミュのピアノにはそういう魅力がある。サガ級の上手い奴らが凌ぎを削っているんだ。俺が出る幕なんかありゃしない。カミュと、自分の距離が、接点が、どんどんと消えていきそうで怖い。

かといって、自分も転科するかといったら、そんな事、殆ど可能性としてゼロに近い選択肢だ。というより、本来ならゼロであるべきだ。

うちは、決して経済的に余裕のあるうちじゃない。小さい妹が二人いる。俺だけそんな好きなことばかりして、遊びみたいなことにお金をかけてもらうわけにいかない。

「お前は度胸もあるし、優しいし、面倒見もいいから獣医とか学校の先生にむいてるんじゃない？」

母さんの声が深く記憶に残っている。

うちの両親は特にこれをしろあれをしろと言ってくる人たちじゃない。特に父さんなんて、記憶にある限り一度もそんな事言ったことない。

母さんは、俺の学校の成績がそこそこいいから、そういったものを活かせて安心して暮らしていける職業についてくれればいいと思っているけれど、それだって「獣医か学校の先生」っていうのはこれまで二度聞いただけだ。

このクィーンズベリに入るのにも随分もめた。働き手が少なくなること、普通の公立の学校に行くのに比べものにならないくらいかかる学費。

俺は、本当は地元の学校に行くつもりだったんだ。けれど、これに関しては父さんが珍しくガンとして譲らなかった。

「高い水準の教育環境に身を置くというのは、学問のみではない得がたいものを得るための一つの機会。それを、親が簡単に疎かに出来るものではない」

結局、奨学金と母さんの実家からの資金繰りでここに入る事になったけれど、専科なんて普通科より学費がかかる。

ただバイオリンが上手いと褒めてもらったから、なんて理由でいけるものじゃない。

これまで漠然と考えていた通り、獣医、もしくは学校の先生で道を決めてしまった方がいい。くっきりと、はっきりとそう思うのに、カミュが専科に行くと思うと心が揺れる。

そして、そのカミュが、まるで俺を誘うように「向いていると思うよ」と言ってくれた言葉がぎりぎり胸の中で体を締め付ける。

カミュが見せてくれた好意を、無下にしたくない。

カミュと一緒に楽しく楽器が弾けたらどんなに楽しいだろ